

ヤマトグループ賛助会員向けニュース 発行部数12万部

# ヤマト福祉財団

Yamato Welfare  
Foundation

No.8

2005 Autumn

# NEWS



シリーズ ③  
ヤマト福祉財団賞受賞者は今…



●障がい者福祉助成金の贈呈式(ヤマト運輸東京支社)



社会福祉法人 訪問の家  
理事長

日浦 美智江さん

ひうら・みちえ

# 重い障害者と共に生きて三十有余年 『生きるというのは明るいうことだ』 小倉昌男前理事長の言葉に感激

「重い障害のある人たちが、二十一世紀の人間社会を拓く」。その信念のもと、三十有余年を重度障害児・者やその家族らの幸せを求めて彼らと共に泣き、共に笑いながら活動してきた日浦美智江さん（67歳）。ヤマト福祉財団の故小倉昌男前理事長をして「生きるというのは、明るいうことだと分かりました」と言わせた、第2回ヤマト福祉財団賞受賞者の日浦さんを、横浜市栄区のご自身が理事長を務める「社会福祉法人・訪問の家」に訪ね、感動にあふれるお話をたっぷりうかがいました。

## みんなの笑い声が みちている「訪問の家」

「訪問の家」は、JR大船駅からタクシーで十分ばかりのところ、横浜市の西の端の落ち着いた住宅街の中にあります。古都鎌倉に隣接し、緑ゆたかな環境にめぐまれています。

夏の日差しが照りつける午前十時前。職員たちが出迎える玄関に、次から次へと通所者（施設利用者）を乗せた車が入ってきます。多くがストレッチャーに横たわった彼らを相手に、「お早う」「お早うございます」と明るく交わされる挨拶。重症心身障害者施設「朋」のホールは、たちまちみんなの笑い声で満たされます。

その笑い声を背に、ホール脇の来客用の部屋で、日浦さんから話を聞きました。

「わたし、よくクロネコさんを利用するんで



「訪問の家・朋」の玄関

す」と日浦さん。「ドライバーはみんな感じのいい人ばかり。いつか小倉さん（故小倉昌男前ヤマト福祉財団理事長）にそのことを言ったらすごく喜んでおられました」

「一度ここへ来てほしかったんですが、それはかなえませんでした。でも、わたしたちが、ここを舞台に、重い障害のある子どもたちの存在とその家族の人生を描いたドキュメンタリー映画、「朋の時間〜母たちの季節〜」の試写会を横浜市内の公会堂で開いたとき、朝早くからおいで下さいました」

試写会が開かれたのは二〇〇二年十二月二十八日。小倉前理事長は、そのとき映画を観ての感想をアンケートに次のように書き残しています。

暗い映画と想像してきましたが、大変明るい映画でした。

生きるというのは、明るいことだと分かりました。

私は生かされて今日があります。これからは良く生きて参ります。

## 重症児教育で わが国初の実践

日浦さんは広島出身です。幼児期の第二次大戦中は、父親の仕事の関係で台北（台湾）におり、原爆の被災からはまぬがれましたが、



原爆で多くの親類縁者や知人を失いました。地元の大学（広島女学院大学）を出、やがて結婚して横浜市で暮らすようになり、二人の男の子に恵まれます。

「それが二人とも可愛いんです。とても可愛かったんです。」と日浦さんは、そのときの自分の思いをこう語ります。

「子供の寝顔を見ているうちに、このままだとわたし、子育てにのめり込んでしまうんじゃないか。それでいいのか。やはり自分自身のために生きる、というものを持たないと……。また、子供から見ると、ああ、おふくろは勝手なことをやっているということでないか、子供は子供で飛び立っていけないんじゃないか、そう思ったんです」

けれども何をやるか。日浦さんはすでに三十歳を超えていました。やがて東京都立大学で心理学の聴講生などを経ながら、当時、東京・原宿にあった日本社会事業学校研究科に入校します。ここですぐれた教師にも恵まれ、社会福祉の勉強をみっちり積む。下の子はまだ三歳前。夕方、疲れて帰宅すると親を求めて泣きわめいている、という状況の中で。

学校を卒業したのは一九七二年。同じ頃、たまたま横浜市が、市内の小学校に重度障害児のための訪問学級を設けることになり、その指導講師としてソーシャルワーカーを求めていることを知り、早速、面接を受けます。

その面接でおよそ三時間、日浦さんは担当者から重い障害のある子の教育について話を聞きます。

「それまでわたしは、障害のある子と接したことはないし、むろん持ったこともない。けれど

も、話を聞いているうち、わたし、こういうところで働かせてもらえたら、という思いに強く押されたんです。不思議です。これが出会いというものですか」と日浦さん。

それまで重症児教育は、教師がその家庭を訪問して行う、というものでしたが、訪問学級はその逆。保護者らにともなわれて子供が学校にやってきます。学校側は、医師にも加わってもらって教育体制をととのえ、ソーシャルワーカーも参加して家族支援を行います。横浜市のこの実践は、わが国初のころみではなかったかと言われます。このときの日浦さんの職名は、訪問学級指導講師。

やがて日浦さんは養護学校に移り、子らの成長とともに地域作業所「朋」の指導員に転じ、そして知的障害者通所更正施設「朋」施設長、社会福祉法人「訪問の家」専務理事、同理事長と、関係者らの厚い信望に支えられて横浜市内における重度障害児者福祉活動の先頭に立つこ



とになります。

## この子がいたから こそその幸せを

仕事を通じて子供の母親らの悩み、苦しみを日常的に聞く。死にたかった話、まともな子を産まなかったと親戚の人から悪口を言われた話などなど。ときに子供をめぐる母親らと施設職員らとの感情の行き違い、あつれき。日浦さんは言います。

「わたしたちと子の親たち、ぜったい交わらないかもしれないが、限りなく近づくことは可能だ。近づこう、理解しようとする、そのわたしたちの姿勢を信じてもらうことが大切。と言っても、親たちには、所詮、自分らの気持ちは分かってもらえない、というものが根底にある





午前10時。施設ホールに勢揃いした通所者の皆さんとスタッフ。40人が通っている。これから今日のスケジュールを話し合う。

から容易ではない」

「わたし、親御さんによく言うんです。(掌と掌を向き合わせて)こうじゃないよ、こうだよ(と掌を並べて同方向に向け)、と……。わたしたちとあなたたちは同じ方向を向いてるんですよ。二人三脚でお子さんの幸せを作ってるんであってそれ以外の何でもない」

「この施設ができたとき、通所者の親たちとの最初の顔合わせがここでありました。そのとき、一人のお母さんが、何かのことで『施設側はどう考えるんですか?』と質問しました。わたしはこの質問がとても気になった。繰り返し言うので、わたしは、ここでのものの考え方に、施設側、親の側と、考え方が別々にあるんじゃない、一緒です。行政だって同じ。『対行政』という発想をわたしはとらない。目的は同じです。役割を分担しているだけ」

## 彼らの笑顔を守ることが私の平和運動

議論あり、涙あり、笑いありの施設の日々ですが、そうした中で、子の親らと日浦さんらとの間に、いつか次のような共通の認識、共通の誓い合いがはぐくまれていました。

『この子がいたからこんな人生しか送れなかった、ではなく、この子がいたからこそ、これほどの人生が送れた、と言える人生を皆でつくろう』

日浦さんにとって楽しいことって何ですか、と訊いてみました。

「プライベートなことと言ったら孫と遊んでいるときかな」

そう言うのと、それまでの笑いとは違う、また別のうれしそうなお笑い顔がその顔をよぎります。が、すぐにまた静かな表情に戻り、

「孫は今、小学校一年生と四歳と一歳の三人で



スタッフの説明を聞く日浦さん。やさしい、自然な笑顔が美しい。

ですが、やはりこの子らが生きていく十年後、二十年後の社会について考えます。わたしは広島に育っただけに、平和ということについては人一倍考えるほうではないか。そしてわたしにとって平和とは、そのために努力すべきことは、この施設のみんなの笑顔を守っていくこと。これがわたしにとっての平和を守ることだな、と思っています」

「この人たちが外に出て、ぎりぎりのところまで穏やかに生きられる社会が残されれば、わたしの孫たちもいい関係の中で生きていけるんじゃないか、と考えています。その土台づくり、それができればと考えています」

「横浜市民は現在、三五〇万人。その中でこの施設の人たちのような重症の障害者は、児童相談所の調べで八〇〇人といわれています。それは『あなたたち、悪いけどこゝへ居てよ』と言えばそれで済んじゃう人数かも知れない。そうじゃなくて、この人たち一人ひとりの生活を守ってあげる、考えてあげることができる横浜市ならば、これは市民全体がだいにされる横浜市だといえると思います」

「だからこゝわたしは、糸賀雄先生(※)の『この子らを世の光に』という言葉を、まさにそうあらねばならないと考えます。そしてその光は世の中に出さなければ見えない。ヤマト福祉財団の小倉前理事長が、『生きることは明るいことだ』と言って下さった言葉、本当にいいことを言っただけで感謝しています」。

日浦さんは、糸賀先生の「この子らを世の光に」という言葉と、小倉前理事長の「生きることは明るいことだ」という言葉の見事な照応に感激するのです。

(取材・文 高田三省)

※糸賀一雄 1914年鳥取県生まれ。京大卒。46年、滋賀県率近江学園。63年、びわこ学園創設に努力。心身障害者療育施設の推進者としての道を歩む。知的障害児者との共感を通して『この子らを世の光に』と訴えた。68年死去。(朝日新聞社編「現代人物事典」)

## 社会福祉法人訪問の家

知的障害者更生施設(通所):朋、集、CAN

高齢者デイサービス事業:地域ケアプラザ(桂台)、地域ケアプラザ(根岸)

障害者グループホーム:きんぱす、どリーむはんず、アレグリア、ふぉーびーす、ひいらぎ、からーず

地域活動ホーム:サポートセンター径、訪問看護・ヘルパーステーションさくら草、朋診療所



施設裏の西瓜畑。通所者らが栽培している。



関東支社贈呈式

# 障がい者福祉助成金の贈呈式が全国のヤマト運輸の支社で行われました。



助成先福祉施設の代表者の皆さん



関西支社贈呈式

障がい者福祉助成金は今まで助成決定先に個別に財団本部から通知を出していましたが、今年度から全国のヤマト運輸の支社、または主管支店で贈呈式を行うことになり、7月の後半から8月にかけて、全国で福祉施設の代表者に助成目録が手渡されました。（助成先一覧は前号に）

エリアの広い東北支社では主管支店単位で6回に分けて実施。九州支社では支社長が直接助成先に出向いて、贈呈式を行いました。

「一層充実した活動に励みたい」「ますます作業の意欲がわく」「子どもたちも大喜び」助成先の皆さんは、お礼の言葉とともに、将来の抱負を話されていました。贈呈式の模様は、各地域の新聞でも紹介されました。



8月20日 東奥日報



7月23日 福島民報



8月1日 物流ニッポン新聞



# 故 小倉昌男 前理事長 「お別れの会」を開催



献花される小泉純一郎首相。当日の午後、参議院で郵政法案が否決。衆議院解散、自民党の歴史的大勝へとつながる、運命の日でした。

写真提供・物流ニッポン新聞社

8月8日(月)、帝国ホテル(東京都千代田区)の2階「孔雀の間」において、去る6月30日逝去された小倉昌男前理事長の「お別れの会」が執り行われました。

ヤマト運輸、ヤマト福祉財団、ヤマト運輸労働組合の三者による実行委員会主催のもとに開催、約3,300名の方々のご参会をいただきました。小泉純一郎首相、堂本暁子千葉県知事、田中康夫長野県知事、ジャーナリストの櫻井よしこさんなど各界の著名人や、立岡暁きょうさん理事長、勝又和夫社団法人ゼンコロ会長、ハンセン病回復者の平沢保治さんをはじめ多くの福祉関係の方々にもご参列いただきました。



献花会場では、大勢の参列者の皆様が最後のお別れを惜しんでおられました。



「偲ぶ会」会場では、生前愛用された品々をご紹介します。



献花台に向かわれる、ジャーナリストの櫻井よしこさん。

「偲ぶ会」会場。写真パネル、ビデオ映像でありし日をご紹介します。



「偲ぶ会」会場のスワンバーカリーコーナー。パン焼き窯を設置。会場で焼いたできたてのパンを、参加者の皆様に味わっていただきました。

## 抄遊交

毎年秋、東京・銀座の老舗の旦那衆がわいらしい方だった。本日ごろ研さん番はとても緊張され、セリフを飛ばしてしまったこともある。舞台から下りてくるなり「もう懲りた、懲りた」とおっしゃる。そこへ「よかった」「感動した」とご友人が次々現れると機嫌が直り、「錦糸さん、来年は何をやるのかな」

八月八日のお別れの会で遺影のそばに茶色のカバンが置かれていた。稽古の時、このカバンから手書きの

## 茶色のカバン

野 澤 錦 糸

小倉さんは小定さんという新橋の芸者さんに師事されていたが、お姉さんが高齢となり、竹本住大夫師匠を介して私にお声が掛かった。「今ごろは半七さん……」のくどきで知られる「酒屋」、「野崎村」、「生写朝顔の笑顔が見られないと思うと、何とも寂しい秋である。（のさわ・きんし 稽古は会の前に数回。 Ⅱ文楽三味線方）

## 障がい者によるクロネコメール便配達

## 精神障がい者小規模作業所 ほっとはうすのばら

利用者 精神30名 知的5名在籍 広島県福山市

不審者と思われ、通報されそうになったことも。  
いまはユニフォームを着て配達しているから、安心。



手前左から美幸ちゃん（加藤さん）、柴ちゃん（柴田さん）、久次米所長。上段左から船ちゃん（船石さん）、源さん（岡田さん）、智香ちゃん（井上さん）、えぐちゃん（江草さん）、坂本メール便センター長。奥の男性、まつん（松川さん）。



顔なじみのお客さんとは笑顔で会話

作業、パチンコ台の解体、銅線作業など、いろいろな仕事に取り組んできました。スペースが手狭になり室内ではなく、外でできる仕事を探していたんです。きょうされん主催の「仕事開発研修会」でメール便事業の講演をお聞きして、「これだ！」と思いました。街中で毎日繰り返してできる。6月13日から配達をスタートしました。福山南メール便センターの坂本センター長さんが、配達担当者全員を自家用車に乗せて配達エリアを何回も巡回していただきました。おかげで配達の手順を事前にイメージすることができて、本当に助かりました。」

福山城を間近におおぐ城見町「ほっとはうすのばら」の「おかあさん所長」久次米博子さんにお話をうかがいました。

「今年の12月で開所して3年になります。福山駅から歩いて5分、人通りの多いところなので、まずリサイクルショップを始めました。それから、食事作り、パソコン作業、パチンコ台の解体、銅線作業など、いろいろな仕事に取り組んできました。スペースが手狭になり室内ではなく、外でできる仕事を探していたんです。きょうされん主催の「仕事開発研修会」でメール便事業の講演をお聞きして、「これだ！」と思いました。街中で毎日繰り返してできる。6月13日から配達をスタートしました。福山南メール便センターの坂本センター長さんが、配達担当者全員を自家用車に乗せて配達エリアを何回も巡回していただきました。おかげで配達の手順を事前にイメージすることができて、本当に助かりました。」

——どのような体制でメール便配達をしているのでしょうか。

「利用者8名、職員1名で月間の配達シフトを組んでいます。基本体制は原則2組（2人1組）のグループ配達です。終了後は毎日メール便日報をつけています。転居などの情報を共有できますから。伝達というコミュニケーションはとても大切だと思います。最初は表札がないところは、すべて持ち帰ったり、いろいろありましたね。

グループ配達のメリットはお互いに助け合い、お互いに刺激しあえる。サポートしかならなかった人が配達にチャレンジしたり。一人では乗り越えられないことも、仲間と一緒に乗り越えることができる。メール便配達の仕事を通してチームワークを大切にする心が育っています。」

——いろいろな事件、ドラマがあったそうですね。

「そうですね。お盆明けのころでしたか、警察通報未然事件がありまして。ユニフォームがまだなくて、私服で配達していたんです。利用者の柴ちゃん（柴田さん）と職員のまつん（松川さん）で配達していたとき、「なにかご用ですか」と年配の女性3人に呼び止められました。番地を確認していたら不審者と間違えられたんです。その地域で以前トラブルがあったらしく、電話に手をかけられて、あわや通報されるところでした。最近メール便配達を始めたばかりで、番地を確認させてもらっているんです。と説明しましたが、「ご納得いただくのに40分かかりました。誤解だとわかったら、申し訳ないと思われたのか『お兄ちゃん、ジュース1本飲んで』って」と言われました。いまはユニフォームを着ているし、顔も覚えていただいたので、そういうことはありません。体調を維持するために途中で休憩も



メール便日報

必要なんです。ユニフォームがあれば休憩もしやすいですね。昨日も玄関でチャイムを鳴らしたら、年配の方がニコツとされて出てこられました。『がんばってね』『まだまだ大変だね』いろいろな方から声をかけていただけようになりました。

こんなこともありました。雑誌の懸賞が届くのを心待ちにしているお子さんが、玄関で待っていたんです。自分たちが届けるのを心待ちにしている人がいる。あの子が待っている、「ニコツと笑ってくれる。日々、ドラマの連続です。地域の人たちと共に生きているんだ、ということが実感できる仕事です。そういったふれ合いが自信につながる。メール便の仕事を始めて、ほんとうに良かったと思います。」

——『ほっとはうすのばらメール便メンバー』の名刺を作り、服装の色合いもユニフォームに合わせる想い入れ……自らメール便配達を志願し、「ヤマトのユニフォーム」に愛着と誇りを持つ「ほっとはうすのばら」のメール便メンバーの皆さんです。



“ユニフォーム”が大好き！ 源さん、智香ちゃんのツーマンで配達。

# ヤマト運輸労働組合の「夏のカンパ」から 4000万円を寄付していただきました。 ありがとうございました。



ヤマト運輸労働組合第60回定期中央大会



左からヤマト運輸労働組合越川中央執行委員長、ヤマト福祉財団伊野常務理事  
あしなが育英会山北理事、ヤマト運輸労働組合村松副中央執行委員長

ヤマト運輸労働組合の「夏のカンパ」の贈呈式が同労働組合第60回定期中央大会（9月19日熱海市ニューフジヤホテル）の会場で行われました。

はじめにヤマト運輸労働組合越川利勝中央執行委員長が、今年実施した「夏のカンパ」は全国の職場の皆さんから、総額5433万円の寄付金を集めることができました。そのうち、ヤマト福祉財団に4000万円、あしなが育英会に1433万5000円の寄付を決めたことの説明があり、壇上ではヤマト福祉財団伊野常務理事、あしなが育英会は山北理事がそれぞれ目録をいただきました。

毎年、労働組合から多額の力強いカンパをいただき、深く感謝と御礼を申し上げます。



贈呈式



ヤマト運輸労働組合越川中央執行委員長

## メール便配達の障がい者の発表が 会場に感銘をあたえました。 ＝第4回経営パラリンピック＝

大阪成蹊大学の学生が中心となって運営している経営パラリンピック。第4回となった今年も、「福祉と経営の融合を皆で学び会おう」を合言葉に9月19日、大阪成蹊大学プラムホールで開催されました。「コミュニティ・パワー」をテーマに経営活動をモデル化した事例にはヤマト運輸「メール便」導入モ

デルも登場し、4施設が取り組みを発表。実際に配達している障がいのある人たちが仕事の苦勞と喜びを語りました。託された期待と責任を自分の言葉で語るみなさんから会場へ共感の大きな輪が広がりました。小倉昌男前理事長がとても大切にしていた経営パラリンピック。着実に成果を残しています。



## スワンのパン、チャリティ販売



スワンベーカリー銀座店が野球大会でチャリティバザールを開催(9月19日)。300セットのパンが完売して、チャリティ募金24,313円を当財団に寄付していただきました。ありがとうございました。

## スワンカフェ&ベーカリー 大東店がオープンしました

open!

大阪府大東市に、新しいスワンベーカリーが誕生しました。お近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。皆さまのご来店を心よりお待ちしております。

### スワンカフェ&ベーカリー大東店

大阪府大東市末広町15-6 Tel.072-871-1120  
営業時間/7:00～19:00(定休日/土日祝日)

最寄り駅/JR学研都市線「住道駅」より徒歩3分



## NEWS & TOPICS

## 障がい者雇用で表彰 ＝山口主管支店＝

山口主管支店は、障がい者の法定雇用率1.8%のところを3.28%でヤマト運輸の会社平均1.96%を大きく上回り、群を抜いての会社トップです。(6月現在)  
このたび山口県雇用開発協会会長賞を受賞しました。受賞の理由は、平成17年度現場実習での知的障害者の受け入れをきっかけに、積

極的に障害者の雇用を進めている。障害者の能力に適した職場配置に心がけ、車椅子用のトイレの改善及び駐車場の確保等の施設改善をはじめ、関係機関との連携をとりながら障害者の職域の拡大に努めるなどです。  
これを励みに一段とレベルアップしてください。



## 株式会社スワンに、 海津 歩代表取締役社長、 平井 昌仁部長が就任

寺本正次常務取締役、笠井康博部長お疲れさまでした。  
海津 歩取締役社長、平井 昌仁部長が新しく就任しました。  
よろしくをお願いします。



海津社長

全員が長所を生かして仲間が助け合う、  
全員経営を目指していきます。



平井部長

喜びのある職場をめざしています

## スワンの仲間がマザー牧場で楽しみました。

スワンの仲間57名が夏のマザー牧場を満喫しました。7月17日、東京湾アクアラインを通り海ホテルで休憩。マザー牧場ではみんなでジンギスカン料理に舌鼓をうち、遊園地で、ゴーカート、迷路、豚レースなどを楽しみました。何に乗り

たいか自分で選んで、チケットも自分で買うということに、はじめてチャレンジ。保護者の世話がなくても自分でできるということが、何よりうれしかったようです。



### swan net information

#### 地域作業所 おおぐち工房

知的障がい者を中心に42名在籍 神奈川県横浜市



スワン  
ネット

**2日間で、とうもろこし3,000本を完売！  
決め手は新鮮さと、日頃からの近所づきあい。**



「おおぐち工房」は地域のさまざまなイベントにも参加。

作業所の旅行で芋掘りに行けばお手を配ったり、日頃から近所と親しくお付き合いさせていただいているから、お祭りでもいい場所に格安で出店できるし、ボランティアで近所の奥さんがお手伝いに来てくださるとのこと。「地域とともに生きる」そういった活動が大切だと教えていただきました。

「祭りの日は朝から戦争状態です。障がい者も総出で皮むき、職員と近所の皆さんがお手伝いに来てくれて大釜でゆめます。商店街の入口にある出店まで運び、ブロックで作った炭焼きコーナーでタレをつけて焼いて販売。お祭りは午後5時から9時までですが、3年目ともなるとお客さんにも覚えていただいていたので、販売する前から列ができています。それというのも、朝、北海道から宅急便で届いたばかりの粒ぞろいの新鮮なとうもろこしを、すぐゆでて焼くわけですから。それはおいしいですよ。お値段は200円!! 土曜に1,800本、日曜に1,200本が、あつという間に売り切れです。今年は障がい者3名が販売にも参加。」とうもろこし、おいしいですよ。焼きたてですよ」と楽しそうに呼び込みしていました。

「おおぐち工房」は、地元商店街の納涼祭で3年連続、とうもろこし3,000本を完売しています。所長の松尾みち子さんにお話をうかがいました。

# 「スワンの2005Xmas」企画開発レポート

## 「よりおいしく」「より楽しく」を演出するため スワンのみなさんが、真剣に取り組んでいます。



今年で8回目となるクリスマスケーキの発売に向けて、スワンでは6月から試作がはじまりました。寄せられたはがきのご意見を元に、グレード・ボリュームともアップを図るべく工場側との打ち合わせと試作を繰り返しています。

今年は、新作として、レアチーズケーキが登場。デンマーク産のチーズと北海道の生クリームを使ったデコレーションケーキになっています。

ポスターも、贈る気持ちや受け取ったときの気持ちを素直に表現したものとなりました。



### レアチーズケーキ

雪のようなデコレーションで  
クリスマスの純真さを表現。

### ヤマト福祉財団全国支部連絡先（ヤマト運輸（株）内）

| 支 部   | 事 務 長 | 連 絡 先            |
|-------|-------|------------------|
| 北海道支部 | 加藤房男  | TEL.011-891-5040 |
| 東北支部  | 平井 忠  | TEL.022-374-8065 |
| 東京支部  | 窪寺敏幸  | TEL.03-5564-3705 |
| 関東支部  | 安田 裕  | TEL.03-3471-9016 |
| 北信越支部 | 酒井 貢  | TEL.025-231-9512 |
| 中部支部  | 内田辰吾  | TEL.0561-61-5111 |

| 支 部  | 事 務 長 | 連 絡 先            |
|------|-------|------------------|
| 関西支部 | 石田久雄  | TEL.06-6682-7127 |
| 中国支部 | 竹下憲雄  | TEL.082-849-1451 |
| 四国支部 | 柳島憲行  | TEL.0877-46-7875 |
| 九州支部 | 目野和彦  | TEL.092-931-3340 |
| 沖縄支部 | 六笠保裕  | TEL.098-859-2811 |



### 本部に 渡辺 聡マネージャー が就任

原島和夫さんお疲れさまでした。  
新しく渡辺 聡マネージャーが  
就任しました。よろしくお願いします。



### 関西支部に 石田 久雄新事務長 が就任

富川 宣臣事務長お疲れさ  
までした。新しく石田 久雄事務  
長が就任しました。よろしくお  
願いします。

賛助会員 個人51,090人 法人ヤマトグループ54社（2005年3月31日現在）

古紙配合率100%の再生紙とアメリカ大豆協会認定の大豆油インクを使用しています。